

日本気象学会 昭和50年春季大会

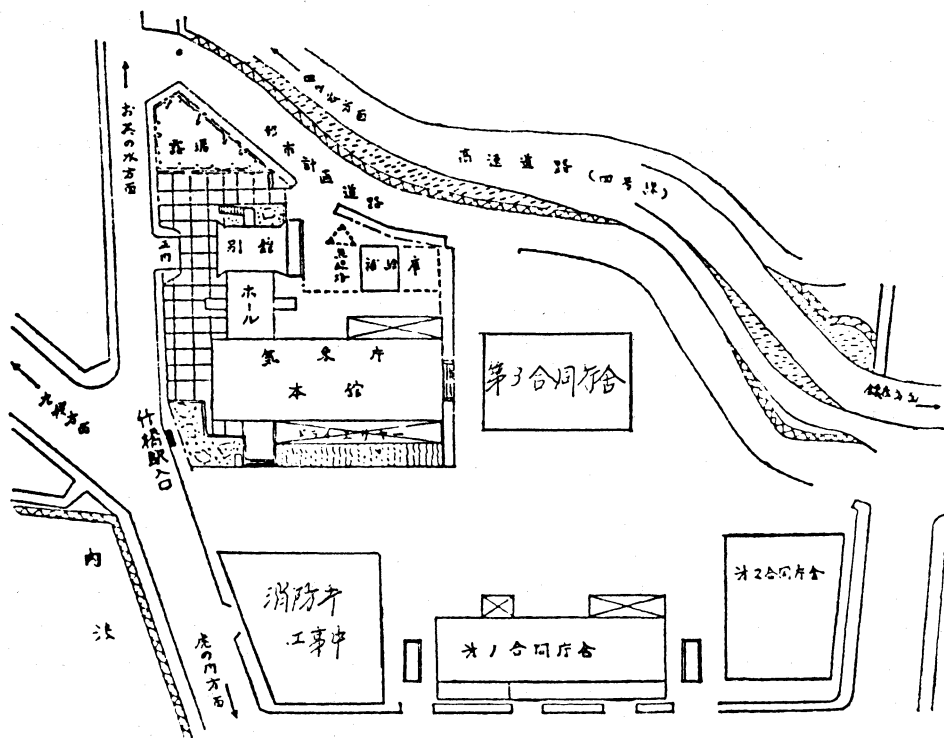
会期：昭和50年5月21日（水）、22日（木）、23日（金）

会場：気象庁（東京都千代田区大手町 1-3-4）

目 次

日本気象学会昭和50年度総会提出議題	150~151
大会行事予定表	152
総会次第	152
研究発表内容一覧表	153
研究発表題目	154~159

会場案内図



(道順) 地下鉄東西線 竹橋駅下車がもっとも便利です。

日本気象学会昭和50年度総会提出議題

会費値上げのための定款の一部改正について

提案理由

第18期理事会では財政の建てなおしに、いろいろの面から努力してきましたが、最近の物価高により会費の値上げのやむなきにいたりました。

このため理事会は定款の一部改正を提案し会員各位の理解と賛同を要請いたします。

改正案

定款第6条第1項第1号中「**3,200円**」を「**3,500円**」

に、「**2,000円**」を「**2,200円**」に、「**3,900円**」を「**4,300円**」に、「**6,400円**」を「**7,000円**」に、「**4,000円**」を「**4,400円**」に、「**7,800円**」を「**8,600円**」に、同項第3号中「**4,920円**」を「**5,400円**」に、「**9,840円**」を「**10,800円**」に、同項第4号中「**15,000円**」を「**30,000円**」に改める。

付則 この定款の変更は、文部大臣の認可の日から施行し、昭和51年1月1日から実施する。

参照 新旧条文

新 条 文 (改正案)	旧 条 文 (現 行)
<p>定 款</p> <p>第6条 この会の種別および会費は、次のとおりとする。</p> <p>1. 通常会員 この法人の目的に賛同し、次の区分により会費を前納する者。</p> <p>A会員 会費として年額金3,500円を納める者、ただし在学中の会員は年額金2,200円、外国に在住する会員は年額金4,300円とする。</p> <p>B会員 会費として年額金7,000円を納める者、ただし在学中の会員は年額金4,400円、外国に在住する会員は年額金8,600円とする。</p> <p>3. 団体会員 この法人の目的事業に賛同し、会費年額A会員として1口金5,400円を1口以上、B会員として1口金10,800円を1口以上納める団体</p> <p>4. 賛助会員 この法人の事業を後援し、会費年額金30,000円以上を納める個人または団体「5号以下変更なし」</p>	<p>第6条 この会員の種別および会費は、次のとおりとする。</p> <p>1. 通常会員 この法人の目的に賛同し、次の区分により会費を前納する者</p> <p>A会員 会費として年額金3,200円を納める者、ただし在学中の会員は年額金2,000円外国に在住する会員は年額金3,900円、とする。</p> <p>B会員 会費として年額金6,400円を納める者、ただし在学中の会員は年額金4,000円、外国に在住する会員は年額金7,800円とする。</p> <p>3. 団体会員 この法人の目的事業に賛同し、会費年額A会員として1口金4,920円を1口以上、B会員として1口金9,840円を1口以上納める団体</p> <p>4. 賛助会員 この法人の事業を後援し、会費年額金15,000円以上を納める個人または団体「5号以下変更なし」</p>

会費の改正案について

物価の上昇が引きつづいている現在、学会は健全財政を維持するのがきわめて困難な状況にあることは、“天気”誌上ですでにお知らせしたとおりです。

“天気”2月号で述べましたように昭和50年度に会費を値上げしても、会費前納制を採用しているため現実の値上げは昭和51年1月からとなり、その寄与は3カ月分

だけとなります。したがって健全財政を維持するためには通常会員、外国人会員、団体会員の会費の平均10%値上げが必要であり、賛助会員の会費も最低額を引上げる必要があります。

参考1 諸経費の新旧比較を第1表に示す。ただし昭和49年度分は2月3日開催された常任理事会

第1表 諸経費増

年次	印刷編集費 (集誌, 天気)	発送通信費	事務費
昭和49年度	13,166千円	2,334千円	5,821千円
昭和50年度	14,896	3,616	7,004
経費増	11.6%	54.9%	20.3%

注) 郵便料金は昭和50年10月からの改正を見込む

で承認された仮決算案の数値である。

参考2 会員の会費負担額

昭和49年度会費と同様に B 会員は A 会員の2倍とした。改定額, 現行額, 値上げ額は第2表のとおりである。

参考3 昭和50年度予算書(案)

第2表 会費改定案

会員の種別	改定額	現行額	値上げ額
通常会員	A 3,500円	3,200円	300円
	B 7,000	6,400円	600円
学生会員	A 2,200	2,000	200円
	B 4,400	4,000	400円
外国在住会員	A 4,300	3,900	400円
	B 8,600	7,800	800円
団体会員	A 5,400	4,920	480円
	B 10,800	9,840	960円
賛助会員	30,000	15,000	15,000円

注) 現行の賛助会費は昭和43年度以降7年間据置かれている。

これら各事項を基礎とした昭和50年度予算書を第3表に示す。

第3表 昭和50年度予算案

科目	収入の部			科目	支出の部		
	金額(円)	内訳	備考		金額(円)	内訳	備考
会費	21,188,000	円		印刷編集費	22,996,900		
A 会費		5,841,500	1669名	気象集誌		6,330,000	年間500頁
B " " A		6,860,000	980名	天気		8,565,600	" 720頁
学生 A		85,800	39名	気象研究ノート		5,946,800	" 720頁
学生 B		431,200	98名	予稿集		954,500	
外国在住 A		4,300	1名	外国文献集		1,200,000	
外国在住 B		825,600	96名	図書購入費	10,050,000		うち9,800,000
団体 A		853,200	158名	発送通信費	3,616,400		円は百年史
団体 B		3,866,400	358名	気象集誌		507,600	
賛助会費		2,420,000	30名	天気		1,297,800	
雑誌図書頒布	22,664,560			気象研究ノート		861,000	
気象研究ノート		7,856,760		予稿集		950,000	
予稿集		1,145,400		外国文献集			
外国文献集		1,200,000		百年			
百年		10,800,000	2250部	その他			
その他		1,662,400		会議費	705,000		
文部省助成金	780,000			学会賞	50,000		
雑収入	3,150,000			藤原賞	50,000		
前年度繰越金	9,651,253		うち9,626,000円は前納会費	奨励金	150,000		
				支部交付金	1,000,000		中部支部の分も計上
				事務費	7,004,000		
				人件費		4,083,200	事務職員ベ-
				物品・印刷費		1,215,000	スアップ15%
				雑経費		1,705,800	で計上
				旅費	80,000		
				退職金	704,000		
				予備金	423,800		
				翌年度繰越金	10,603,713		うち10,536,200円は51.4月から12月分の前納会費
合計	57,433,813			合計	57,433,813		
基本金		650,000					
職員退職積立金		120,000					
藤原賞基金		1,500,000					

大会行事予定表

1. 会場 気象庁（東京都千代田区大手町1-3-4）
 第1会場：講堂（予定）
 第2会場：第1会議室（予定）
 第3会場：気象大学校研修教室（予定）
2. 会期 5月21日（水）、22日（木）、23日（金）
3. 行事

行事		
大会（研究発表）（第1，第2，第3会場）	5月21日（水）	9.00～12.30
" "	"	13.30～17.00
大会（研究発表）（第1，第2，第3会場）	5月22日（木）	9.00～12.00
シンポジウム（第1会場）	"	13.00～15.00
総 会（ " ）	"	15.00
学会賞藤原賞受賞記念講演（ " ）	"	～17.30
懇 親 会	"	17.30
大会（研究発表）（第1，第2，第3会場）	5月23日（金）	9.00～12.30
" "	"	13.30～17.00

大会委員長（山崎 正博）

総 会 次 第

1. 開会の辞
2. 議長選出
3. 理事長挨拶
4. 学会賞授与
5. 藤原賞授与
6. 昭和49年度事業経過報告
7. 昭和49年度会計決算報告
8. " 会計監査報告
9. 昭和50年度予算案，事業計画，予算審議
10. 会費値上げのための定款の一部改正について
11. そ の 他
12. 気象学会賞受賞記念講演
13. 藤原賞受賞記念講演

昭和50年春季大会

(): 講演番号
— : 座 長

	第 1 会 場		第 2 会 場		第 3 会 場	
21日 (水)	0900~1230	AMTEX (101~112) — 斎藤 直輔 —	0900~1115	雷・放射能(201~209) — 三崎 方郎 —	900~1015	気象災害・天気予報 (301~305) — 奥田 稜 —
			1115~1230	エアロゾル(210~214) — 池辺 幸正 —	1015~1230	大気放射 (306~313) — 会田 勝 —
	1330~1700	境界層 (113~123) — 伊藤 昭三 —	1330~1500	エアロゾル(215~220) — 池辺 幸正 —	1330~1700	大気放射 (306~313) — 藤本 文彦 —
			1500~1700	雲物理(221~228) — 山下 晃 —		
22日 (木)	0900~1200	境界層 (124~134) — 近藤 純正 —	0900~1200	雲物理・積雲 (229~240) — 武田 喬男 —	0900~1200	大気大循環(328~339) — 松野 太郎 —
	1300~1500	シンポジウム				
	1500~1730	総会				
23日 (金)	0900~1230	境界層 (135~147) — 横山 長之 —	0900~1230	積雲・大雨(241~254) — 立平 良三 —	0900~1230	気 候 (340~352) — 根本 順吉 —
	1330~1700	大気汚染 (148~159) — 森口 実 —	1330~1700	力学・総観気象 (255~267) — 新田 勲 —	1330~1430	気 候 (353~356) — 根本 順吉 —
				1430~1700	測 器 (357~366) — 毛利 文郎 —	

シンポジウム「MONEX について」

1. 日 時 第2日 (22日) (木) 13時~15時
2. 会 場 第1会場
3. 座 長 岸保勘三郎
4. 話題提供者

村上勝人：モンスーンの解析および大循環モデルによる数値シミュレーションの現状

斎藤直輔：梅雨とモンスーン

吉田耕三：亜熱帯反流について——MONEX に関連して

注 なお MONEX の informal meeting は第3日 (23日) (金) 17時15分~18時30分、第3会場で開かれますので、関心のある会員はお集り下さい。

講演発表者へのお願い

1. スライドのマウントに番号をつけること。
2. スライドの上下を揃え、分るようにすること。
3. 講演時間は12分程度しかありませんので、スライドの標準枚数は6~8枚です。
4. 持ち時間 (15分) を超過したときは中止していただくことがあります。

研 究 発 表 題 目

大会第1日(21日) 9時~12時30分

第1会場 AMTEX・境界層 座長 齋藤直輔

101. 新田 勲(東大・理): AMTE'74における熱および水蒸気の収支解析(I)
102. 新田 勲(東大・理): AMTEX'74における熱および水蒸気の収支解析(II)
103. 二宮洗三(気研・予報): 顕熱補給と下層の温度移流(簡単な変分解析)
104. 二宮洗三(気研・予報): AMTEX'75の気団変質の総観状況
105. 二宮洗三(気研・予報): 冬期北陸のメソ擾乱の客観解析
106. 秋山孝子・二宮洗三(気研・予報): AMTEX'74のレーダー総観解析
107. 足立俊三・孫野長治(北大・理): 寒気の流出時の cloud pattern と総観場について
108. 竹内衛夫・阿部克也(気研・予報): 東支那海低気圧の総観的解析
109. 柳沢善次・大塚 伸・神林慶子(気研・台風): 宮古島におけるエンジェルエコーの観測について(AMTEX 1974)
110. 近藤純正(東北大・理): AMTEX-74 海面熱収支(2). 顕熱と蒸発の水平分布
111. 佐橋 謙(岡山大・教育). 米谷俊彦(岡山大・農研): AMTEX '75の観測結果(速報)
112. 田中正昭(京大・防災研): ひうち灘の海面における熱収支

第2会場 雷・放射能 座長 三崎方郎

201. 竹内利雄・仲野 貴(名大・空電研): 雷観測レーダー
202. 竹内利雄(名大・空電研): 西太平洋上の発雷頻度
203. 竹内利雄・仲野 貴(名大・空電所): 北陸地方の冬の雷
204. 仲野 貴(名大・空電研): 雲内雷放電路について
205. 植村 斉(東海大・海洋) 葛城幸雄・金沢照子・杉村行勇(気研・地球化学)・三宅泰雄(地球化

学研究協会): 東京における Pb-210 降下量について

206. 三宅泰雄(地球化学研究協会) 猿橋勝子, 葛城幸雄, 金沢照子(気研・化学): 放射性降下物の落下量における地域的变化
207. 三宅泰雄(地球化学研究協会) 猿橋勝子, 葛城幸雄, 金沢照子(気象研・化学): 放射性物質降下量予想の可能性について
208. 望月 定・関川俊男(東理大・理)・双木泰男(都立深川高): 八丈島におけるラドン濃度測定
209. 望月 定・増田純夫・関川俊男(東理大・理): イオン対生成率の連続測定と附着係数の評価

エアロゾル 座長 池辺幸正

210. 矢野 直・前橋紀恵子(気研・応用)・桂川秀嗣(東邦大) バックグランド汚染評価のためのエアロゾル粒子分析
211. 朝来野国彦(都公害研) エアロゾルの導電率特性と汚染物質の関係
212. 伊藤朋之(気研・物理): 太平洋上のサブミクロンエアロゾルの測定(バックグランドエアロゾルの研究3)
213. 石坂 隆・磯野謙治(名大・水圏研): 都市大気中のエアロゾルの分布(I)
214. 池上三和子・三崎方郎・金沢五寿雄(気研・高物): 大気電気伝導率の局地性

第3会場 気象災害・天気予報 座長 奥田 稜

301. 倉嶋 厚, 谷川良次(気象庁・予報): 死者数に現われた近年の気象災害の特徴
302. 越智 疆(気象庁・予報): 雷雨の強雨域と落雷の分布
303. 高橋喜彦: 天気予報の絶対適中率
304. 大西外史(防衛大): 周期分析による統計予測について
305. 広瀬元孝(気象研・予報): 北半球500mb 高度による天気型の長期予報

大気放射 座長 会田 勝

306. 中沢高清・青木忠生・田中正之(東北大・理):

- 赤外気体吸収線パラメーター測定における誤差について
307. 田中正之・青木忠生・山内 恭・山本義一(東北大・理): CO₂ 近赤外帯の吸収特性(続)
308. 岩坂泰信(名大・水圏研): O('D)の脱励起機構
309. 広野幹彦(新潟大・工): 非ローレンツ型吸収線の経験式
310. 青木忠生(東北大・理): オゾンの電気四重極子能率
311. 小川利紘(東大・理): 成層圏における NO_x の生成
312. 岩坂泰信(名大・水圏研): オゾン層における SO₂ の酸化反応(IV)
313. 福山 薫(京大・理): 長期にわたる大気光強度変動の考察

大会第1日(5月21日)13時30分~17時

第1会場 境界層 座長 伊藤 昭 三

113. 田中 浩(電波研): 大気境界層中の Critical level 附近に発生する乱流層
114. 福島 圓・秋田錦一郎・田中 浩(電波研): ソーダ観測(2年間)による境界層中の平均的溫度変動分布
115. 水野建樹(公資研): 境界層中の乱流と Taylor の仮説
116. 高橋喜彦: 風速変動から交換係数を求める法
117. 島貫 陸(東学芸大): 風速シャーが小さい気層における乱流輸送
118. 坂上治郎・加藤真規子・斎藤久子・宮木紀子(お茶大・理): 大気中の熱塊の構造(II)
119. 内藤玄一(防災センター): 海上風の鉛直方向のコヒーレンスについて
120. 光田 寧・塚本 修(京大・防災研)・文字信貴(大阪府大・工): 多良間島における乱流輸送量の測定・その2
121. 林 泰一(京大・理)・藤谷徳之助(気研・物理)・光田寧(京大・防災研): 海面上の Bulk 係数について・その2
122. 文字信貴・伊藤昭三・松崎純枝(大阪府大・工)・光田 寧(京大・防災研): 浮力を持つジェットの基本実験
123. 近藤純生・安田延寿・金近 治(東北大・理): 安定時における乱れの間欠性について

第2会場 エアロゾル 座長 池 辺 幸 正

215. 中谷 茂(電総研)・角田智良(東理大): 大気電気伝導度とエアロゾル濃度について
216. 池辺幸正・鈴木孝昌・下 道国・浅野芳裕・林克彦(名大・工): 大気小イオンとエアロゾル粒径分布
217. 鈴木孝昌・池辺幸正・下 道国(名大・工): sta-

tic 方式によるサブミクロン粒子の粒径分布測定(III)装置の自動化と測定例

218. 長岡 鋭・池辺幸正(名大・工): 微水滴の帯電特性
210. 織笠桂太郎(室蘭工大): 降雪に伴うイオン・エアロゾルの挙動について
220. 織笠桂太郎(室蘭工大): 降雪現象の電荷分離について

雲物理 座長 山 下 晃

221. 小野 晃・田中豊頭(気研・物理): 自然氷晶核物質の同定について
222. 田中豊頭(気研・物理)・松原広司(東管): 自然氷晶核の性状と活性化温度スペクトル
223. 松原広司(東管)・田中豊頭(気研・物理)富士山頂における自然氷晶核濃度の変動特性(V)一まとめ
224. 藤田慎一・孫野長治(北大・理): 手榴弾型、擬つづみ型氷晶について
225. 山見信之・孫野長治(北大・理): Bisectrix 軸方向に成長した氷晶について
226. 権田武彦・高木 謙(東理大・理工): 電気温度計による氷晶成長槽内の温度測定について
227. 山下 晃(東大・理): 氷晶の成長機構について
228. 桜井兼市(北数大・旭川): 過冷却霧粒及び溶解した氷晶の凍結温度

第3会場 放射 座長 藤 本 文 彦

314. 高村民雄・浅野正二・山本義一(東北大・理): エアロゾルの光学的特性に関する実験(II)
315. 三田昭吉・磯野謙治(名大・水圏研): エアロゾルの地球の熱収支に及ぼす影響——特に物質組成及び湿度変化を考慮して——
316. 嘉納宗靖・鈴木正・宮内正厚(気研・高物): 放射量と雲の同時観測について

317. 嘉納宗靖・宮内正厚(気研・高物)：温度が一様でない雲内の放射伝達の計算
318. 会田 勝(横浜国大)：水平方向不均質大気の放射特性
319. 田中正之・中島映至(東北大・理)：大気・海洋系の放射伝達Ⅱ-大気海洋系のモデル
320. 佐藤隆夫(長崎大)：火星における二次散乱光強度の値の図示
321. 佐藤隆夫(長崎大)：斜面における日照時間の年変化の図示
322. 久保田効(気象庁・電計)：暖かい地面・海面からの赤外線放射吸収による境界層の加熱
323. 村井潔三・小林正治・山内豊太郎・後藤良三(気研・高物)：ヘリコプターによる日射観測について
324. 村井潔三・小林正治・山内豊太郎・後藤良三(気研・高物)：短波長放射諸成分の地上測定結果について
325. 井沢竜夫(気研・台風)・井上豊志郎(気象庁・衛星)：VTPR データによる気温の沿直分布
326. 山本義一・青木忠生・田中正之(東北大・理)山香英三(松下技研)：地上設置型気温垂直分布測定装置について
327. 川口貞男(国立極地研)：南極における放射ゾンデ観測

大会第2日(22日) 9時~12時

第1会場 境界層 座長 近藤純正

124. 林 正康(公資研)：風向変動の測定
125. 横山長之・蒲生稔・山本 晋・吉門 洋(公資研)：川口タワーにおける乱流の観測
126. 山本 晋・横山長之・蒲生 稔(公資研)：飛行機による乱流の測定—その2(熱輸送量測定における動揺の誤差の補正について)
127. 蒲生 稔・山本 晋・横山長之(公資研)：高度1~2km までの粘性消散率の高度分布
128. 角田道生・林 隆(原研)：地上90m および20mの鉛直変動風速の比較
129. 米谷俊彦・瀬尾琢郎(岡大・農業生物研)：植物群落上の乱流特性について(Ⅱ)
130. 菊地時夫(北大・低温研)：低い地吹雪の上での風について
131. 小林俊一(北大・低温研)：地ふぶきによる波状雪面模様の形成と乱流
132. 樋口政男(教育大・理)：地表付近の温度・湿度の数值シミュレーション
133. 樋口政男(教育大・理)：都市表面の熱収支
134. 福岡義隆(福島大)：空港と隣接都市の気温差に関する都市気候学的考察

第2会場 雪物理・積雲 座長 武田 喬 男

229. 梶川正弘(秋田高専)：角柱型雪結晶の落下速度の測定
230. 菊地勝弘(北大・理)・A.W. Hogan (ニューヨーク州立大)：夏季の南極点における氷晶の観測
231. 中島暢太郎(京大・防災研)：ネパール・ヒマラ

ヤにおける8ミリカメラによる雲の観測

232. 樋口敬二・上田 豊(名大・水圏研)・井上治郎(京大・防災研)：ネパール、ヒマラヤにおける雪結晶の観測
233. 鵜飼重孝(上智大)：細雨の雨滴粒度の一測定法
234. 藤原美幸・市村市太郎・柳瀬利子(気研・台風)：海洋性の弱い積雲内の降水粒子分布(AMTEX・1974)
235. 塩月善晴(山口大・工短部)：集中豪雨の粒度分布について
236. 武田喬男・藤吉康志(名大・水圏研)：名大垂直レーダーシステムによる雪の融解過程の観測
237. 武田喬男・和田 誠・藤吉康志(名大・水圏研)：名大垂直レーダーシステムによる降水雲の観測
238. 武田喬男・和田 誠(名大・水圏研)：宮古島において観測された降水雲の構造(続報)
239. 清野 裕・八木鶴平・小元敬男(国立防災センター・東京)レーダーおよび雨滴粒度分布からみた雷雨の構造
240. 米谷恒春・小元敬男(国立防災センター)：気塊の運動から見た対流雲の発達について

第3会場 大気大循環・大気振動 座長 松野 大 郎

328. 田宮兵衛(東教大)：1967/68年冬の突然昇温に際しての対流圏中・上層の状態について
329. 村松久史・経塚 貢(気研・高物)：成層圏・対流圏におけるオゾンの輸送(Ⅱ)
330. 荒井 康(気研・予報)：準定常波と移動波の分離について(Ⅱ)——超長波の統計解析第10報

331. 荒井 康(気研・予報)：夏期中緯度の西進波について——超長波の統計解析第11報
332. 中村 一(東大・理)：大気大循環モデルのテスト——(2) 大山脈の障壁効果
333. 山下喜弘(気象庁・衛星)・池上比呂志(気研・高物)：極域熱圏風系数値計算(I)
334. 宇加治一雄・玉木克美(福岡大・理)：内部加熱による回転流体の運動(2)
335. 川平浩二(京大・理)：中間プラネタリー波の力学的特性
336. 田平 誠(愛知教育大)：内部重力波の非線型相互作用について
337. 大西外史(防衛大)：山越え気流の一考察
338. 荒川正一・田代憲一(気象大)：地表風の周期的変動と内部重力波の振舞
339. 渡辺 明(気象庁・電計)：羽田に発生した気圧波動の研究

大会第3日(5月23日)9時~12時30分

第1会場 境界層 座長 横山長之

135. 吉門 洋(公資研)：海陸風の水平スケールと数値モデル
136. 北林興二(公資研) エネルギー収支からみた海陸風モデル
137. 江口恒夫(公衆衛生院)・木村竜治(東大・海洋研)：海陸風の実験
138. 蒲生 稔・山本 晋・横山長之・吉門 洋(公資研)：海陸2境界面上に発達する内部境界層の飛行機観測(その3)
139. 山元竜三郎(京大・理)・宮田賢二(広島女大・家政)：海陸風に対する山岳効果について
140. 伊藤昭三・松崎純枝・文字信貴(大阪府大・工)：海風のモデル化
141. 伊藤昭三・松崎純枝・文字信貴(大阪府大工)：海風の解析
142. 吉門 洋・蒲生 稔・横山長之(公資研)：鹿島の海陸風の鉛直構造
143. 谷治正孝・会田勝(横浜国大)：相模平野の海陸風と大気汚染の観測例
144. 沢井哲滋(東大・理)：都市気塊と局地循環の生成—2次元数値モデル—
145. 高野憲治(東大・理)：都市気塊と局地循環の生成—3次元数値モデル—
146. 木村竜治(東大・海洋研)：ヒート及びクールアイランドにおける慣性効果
147. 北林興二(公資研)：よどみ流の風洞実験

第2会場 積雲・大雨 座長 立平良三

241. 武田喬男・今井博雄(名大・水圏研)：長続きしたセル状エコーについて
242. 村松照男(札幌管区)：渦状エコーの構造
243. 村松照男(札幌管区)：帯状エコーによる降雪の

数時間変動について

244. 松尾敬世・中内義貴(室戸測)：四国地方に大雨を降らせる線状エコー
245. 丸山健人・常岡好枝(気研・予報)：42・7豪雨の降雨帯の追跡(統報)
246. 榊原 均(気研・予報)：山の風上側での降水雲のふるまい
247. 後町幸雄(京大・防災研)：山岳降雨のモデル
248. 立平 良三(気象庁・電計)：集中豪雨との地形性降雨
249. 森屋叔昌(東海大)：降雨と風力との関係
250. 小元敬男・清野裕・八木鶴平(国立防災センター・東京)ひょう雲の行動と降ひょう分布について
251. 小元敬男・八木鶴平・米谷恒春・清野裕(国立防災センター・東京)：群馬県における降ひょう分布観測
252. 八木鶴平・清野裕・小元敬男(国立防災センター・東京)：雷雨の等エコー構造と移動方向および大気平均流との関係について
253. 今 久・孫野長治(北大・理)：積雪(二次元モデル)の移動速度
254. 北出武夫(気研・台風)：卓越しやすい対流のスケールについて

第3会場 気候 座長 根本順吉

340. 山元竜三郎・岩嶋樹也(京大・理)：火山大噴火に伴う下部対流圏の気温変化について
341. 大井正一・内山徳栄(気研・予報)：成層圏天気図の解析(25) 30mb 冬から夏へ
342. 井上治郎(京大・防災研)：ヒマラヤ高山地域における熱と水の交換(II)
343. 比較水河研究会(発表者樋口敬二)：ネパール・ヒマラヤ水河気候調査(1) (総括)

344. 比較氷河研究会（発表者中島暢太郎）：ネパール・ヒマラヤ氷河気候調査（2）（降雨のシノプティック解析）
345. 比較氷河研究会（発表者 前晋爾）ネパール・ヒマラヤ氷河気候調査（3）（積雪・氷河）
346. 比較氷河研究会（発表者藤井理行）ネパール・ヒマラヤ氷河気候調査（4）（周氷河現象）
347. 土屋 巖（気研・企画）：現在の気候状態のもとで発生する東北地方の氷河現象
348. 小岩清水（専修大附高）：越後山地「巻機山雪渓調査報告」
349. 田淵 洋（法政大）：最終氷期における十勝地方の春の強風について
350. 高橋道雄・福岡義隆（福島大）年輪気候因子の統計解析
351. 真鍋大覚・佐藤洋子（九大・工）：屋久杉と箱根杉に現われる四世紀の東西気候差
352. 真鍋大覚・佐藤洋子（九大・工）ロブ ノル(Rob Nol) の転位周期

大会第3日（5月23日）13時30分～17時

第1会場 大気汚染 座長 森 口 実

148. 関 清宣（神奈川県）：所謂酸性雨の気象的解析と予測
149. 竹内丑雄（成蹊小学校）：雨水の pH について
150. 河村 武（気研・応用）：東北地方における地上風系の気候解析
151. 林 陽生（法政大学大学院）局地風の気候学的研究
152. 関 清宣（神奈川県）：パスケル安定度の試算結果について
153. 林 正康（公資研）：大気拡散推定の一方法
154. 水間満郎（京大・原子炉）：変分法による大気汚染濃度場の解析
155. 岡本真一・塩沢清茂（早大・理工）・大滝 厚（明大・工）：拡散モデルによる大気汚染シミュレーション（第2報）
156. 岡本真一・塩沢清茂（早大・理工）・大滝（明大・工）：拡散モデルによる大気汚染シミュレーション（第3報）
157. 大滝 厚（明大・工）・塩沢清茂・岡本真一（早大・理工）：大気汚染濃度の統計的推定方式（第4報）
158. 増原孝明（都立大大学院）：東京都内におけるCOによる大気汚染について
159. 竹内清秀・木村富士男（気研・応用）：拡散式の簡易オイラー的取り扱いとその東京地方への適用

第2会場 力学・総観気象 座長 新 田 勲

255. 藤井盛澄（大阪電通大）：冬季、中緯度寒気の南下に伴い、低緯度上層に発生するジェットについて
256. 小沢 正・内山良子（気研・予報）：土佐沖低気

庄の総観的機構について

257. 荒川秀俊（東海大・理）・堤敬一郎（気研・予報）：昭和43年飛騨川バス転落事件当日のスコール
258. 枝川尚資（京大・防災研）：気象衛星写真による梅雨前線帯の雲分布
259. 村上勝人（気研・台風）：インドにおけるモンスーン擾乱の解析（2）
260. 飯田睦治郎・丸山健人・常岡好枝（気研・予報）：アジア南西モンスーン時におけるじょう乱の解析（第2報）
261. 丸山健人（気研・予報）：インド洋上空の成層圏赤道波
262. 吉住禎夫（気研・予報）：前線帯の不安定波動
263. 岸保勘三郎（東大・理）：対流効果を考慮した中間規模じょう乱の安定度
264. 和田美鈴（気研・台風）：Arakawa の parameterization の性質について（2）
265. 大西晴夫（気象庁・電計）：台風の数値実験一積雲の効果について
266. 阿部克也（気研・予報）：ファイン・メッシュによる台風の進路予報例（その2）
267. 石島 英（琉大）：台風域内、外における潜熱及び顕熱の輸送

第3会場 気候 座長 根 本 順 吉

353. 中西 朗（新潟市立桃山小）：根室半島最低気温と瓢湖白鳥渡来最大羽数について
354. 山下喜弘（気象庁・衛星）・池上比呂志（気研・高物）：Solar flare particles と極域大気現象
355. 須田滝雄：極夜渦の消長に及ぼす太陽活動の影響
356. 須田滝雄：気候変動と社会現象との関係について

- の客観的解析例
測器 毛利文郎
357. 大西外史(防衛大) : ミリ波による気温分布の遠隔測定について
358. 浅井辰郎(お茶大)・林陽生(法政大学大学院) : ビル内の垂直気温分布と外気温との関関
359. 降旗常雄(気研・海洋) : 時間移動平均器について
360. 外山芳男(気研・高物) : 気象庁露点ゾンデの霜点測定誤差の原因について
361. 後町幸雄・高杉年且(京大・防災研) : 雨滴計の記録および解析について
362. 百瀬晴行(東大・理) : 相関法による雲の移動ベクトルの推算
363. 高山陽三・村山信彦(気研・衛星) : 衛星画像による雲移動ベクトル算出のアルゴリズムのテスト—第2報
364. 小平信彦・村山信彦(気研・衛星) : 衛星塔載用レーダについて
365. 内藤恵吉・村山信彦(気研・衛星) : スペース・シャトル塔載ライダーによる対流圏観測の可能性
366. 佐橋謙(岡山大・教育)・大滝英治(岡山大・教養) : P. Hyson (CSIRO) AMTEX '74における岡大測器とオーストラリア測器との比較

≡≡≡海外だより≡≡≡

GAO 通信第1号

1月の半ばにジュネーブに着任して、1ヶ月過ぎました。まだ、かけ出しで様子がよくわからない点も多いのですが、こちらの様子を少しずつお知らせして、GARPのホットなニュースを気象学会員に提供するのも仕事のひとつと考えて、時々書くことにします。本誌のGARP Newsを重複することもあるでしょうが、その点をご諒承下さい。

先ず、組織のことから復習します。ICSU WMOの協力事業として出発したGARPの、最高決議機関はJOC (Joint Organizing Committee) です。目下、chairmanのStewart以下12人の委員がおり、日本からは東大の岸保さんが入っています。(いずれ後日全メンバーのリストを書きます。) その下に執行機関のJPS (Joint Planning Staff) があり、Döösがdirectorで、その下にBoldirev (ソ) がいます。一方、FGGEなどが具体化してくるにつれて、単なる計画段階から、実施段階に移行してきたため、今年の1月からWMOの中にGAOで(GARP Activities Office) が出来ました。やはりDöös

がdirectorです。つまり、JPSはICSUとWMOの両方に同等に属し、GAOは全部WMOに属しdirectorが共通、ということになっています。GAOには、Rubin (米)と新田(日)が入っています。(近くGATE関係で更に2名入る予定)。

こういう組織ですが、仕事の方は専門に応じて実際は決められています。Boldirevは気象衛星の専門家なのでFGGEの観測実施計画全体を担当しており、data managementなど現場のこともやっています。Rubinは各方面への正式の報告書の作成を全部うけておいて、GARPが公式の場で十分討議されるよう努めています。新田は、数値実験計画全体を担当しており、更にMONEXなどのGARPのSub-programmeの推進も受持っています。従って、どちらかという計画、企画といったニュアンスが強い仕事です。その他に3人の女性秘書がいます。次信で仕事の内容などお知らせしましょう。(新田 尚)